

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格①

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章2節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

私たちは先週から霊的リーダーについて改めて考え始めました。教会で仕える長老や執事と呼ばれるリーダーが一体どのような存在なのか、またそんなリーダーが私たちひとりひとりの信仰生活にとってどれほど大切なのか、Iテモテ3章のみことばを通して見ています。きょうはその続きをIテモテ3：2から学んでいこうと思います。

【歴史的背景】

内容を見ていく前に、この手紙が記された歴史的背景をもう一度思い出してみてください。パウロがこの手紙をテモテに宛てて書き送ったのは、パウロが心から愛していたエペソの兄弟姉妹たちが危険に直面していたからでした。パウロが以前警告していたとおり、彼らの教会には教会の外とうちから聖書が教えていることとは異なる教えをする偽りの教師たちが入り込んでいました。そしてそんな間違った教えをするリーダーたちによって、教会は引き裂かれ、人々の間には争いが起こっていたのです。本来であれば、だれよりもみことばに堅く立ち、みなを守り導くべき存在のリーダーが道を外れてしまったことによって、教会には一致ではなく混乱が起こっていました。そのことを目の当たりにしたパウロは、もちろんそのままではしませんでした。彼は愛する兄弟姉妹たちが苦しんでいるのを見て、その人たちを助けようとして弟子のテモテをエペソの地に残し、その問題を解決させようとしたのです。そしてその際、教会で起こっている問題をどう取り扱えばいいのかを教えるために、パウロはこの手紙をテモテに書き送りました。

ですからこの手紙の一番最初のところ、1：3-4を見ると、こんなことばで始まっていました。

「私がマケドニアに出發するとき、あなた（テモテ）にお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて、ある人たちが違った教えを説いたり、果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。」と。パウロはみことばの教えに反するリーダーがどれほど教会に大きな影響をもたらすのかということをよくわかっていました。エペソの教会はまさにその点をきっかけとして教会全体が混乱し、崩れ始めていたのです。だからこそパウロはこの手紙を通してそういった者たちを厳しく扱い、同時にどのようなリーダーが教会には必要なのか、霊的リーダーのあるべき姿をこの手紙、特に3章の中で書き記していました。そして、何度も何度も言いますが、このことは今の私たちにとっても重要なことだということです。リーダーがみことばからそれてしまえば教会は揺らいでしまいます。だからこそ私たちが主に喜ばれる教会として成長し続けようとするのであれば、パウロが教えているこの霊的リーダーの姿を正しく覚えて、そのみことばの基準に立ち続けることが欠かせないのです。

では、パウロが教えている霊的リーダーのあるべき姿とはそもそも一体どのようなものでしょうか？みことばは教会のリーダーに関して、どんな基準を設けているのでしょうか？先週、パウロはその基準を具体的に示していく前に、霊的リーダー、特に教会全体を監督するリーダーの働きというものがいかにすばらしいものであるかということを私たちに教えてくれていました。もう一度1節を見ていただくと、パウロは「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは**真実**です。」と書いていました。パウロは、教会のリーダーとして犠牲を払ってでも神様と人々に仕えたいという強い願いが心のうちに与えられているのであれば、それはすばらしい願いだと言っていました。もしそのような願いが与えられている人がいるのであれば、それは熱心に追い求めるべき立派

な働きだと。でもこれはもちろん願ひさえ持っていれば、すべての人が自動的にリーダーになれるという話をしているわけではありません。だからこそどれだけ教会で仕えることがすばらしいことなのか、監督として仕えることがすばらしいことなのかを述べたその後、2-7節の中で教会を監督するのにふさわしいリーダーとはどんな存在なのかを具体的に語っていくのです。パウロは特に、教会全体を導くリーダーが満たしていなければならない15個の資格を2-7節の中に挙げてくれています。これから私たちはそのリストを一つ一つ見ていくのですが、是非皆さん、自分のこととしてよく考えてみてください。この一つ一つが私たちがいつまでも変わらず立ち続けなければならない神様の基準なのです。

また、前回も言いましたが、もし皆さんの中に自分は今リーダーではないし、この先リーダーになることも多分ないだろう、だからこの話は自分と余り関係ないのではないかと感じている方がいるのだとすれば、このシリーズを通して覚えておいてくださいと先週言った四つのことを是非思い返してください。先週、皆さんにこんなことをお願いしました。

まず一つ目に、これから見ていくリストは、霊的リーダーだけのものではありませんと言いました。今から15個のリストを見ていくのですが、そのリストはすべてのクリスチャンに当てはまるものだという事です。ここに出てきている基準は、すべての人が目標とするべき信仰の成熟した者の姿だということです。だからもしたとえ今リーダーでなかったとしても、この先リーダーになることがなかったとしても、それぞれが自分の今の歩みと、このリストに書かれている資格をよく見比べてみてください。そして、自分自身にどんな点が欠けているのか、自分自身がどんな弱さを持っているのかということをよく考えてみてください。

二つ目にこのリストは、教会のリーダーのあるべき姿をはっきりと示してくれているものです。だからこそ是非このリストに記されている資格をもって、今立てられているリーダーひとりひとりがみことばに立って歩んでいるかどうかをよく吟味してくださいとお願いしました。この基準と照らし合わせながら吟味し、祈り励ましてください。

三つ目に男性の皆さんにお願いしました。このリストは、私たちひとりひとりが目指していくべきリーダーの姿です。私たち男性は、家庭や職場においても、教会においてもここに書かれている姿を目標としていかなければいけません。だからこのリストを自分のこととしてよく考えてみてください。

そして最後に、女性の皆さんにもお願いしました。まずそれぞれが自分自身の歩みが主の前に喜ばれるものかどうかをこのリストと照らし合わせながら吟味してみてください。そしてそれに加えて、結婚されている皆さんは是非ご自身の夫がここに記されているリストにかなった者として成長できるように愛を持って励まし、祈ってあげてください。そして結婚していない方であれば、このリストに記されている男性を追い求めることが大切になります。

ですから、今から見ていく3章のすべてのみことばは、私たちひとりひとりにとってとても大事なものだということです。すべての人に当てはまるものだという事です。そのことをいま一度踏まえた上で、早速みことばを見ていきましょう。これから見ていく15個の資格を一通り見るために1-7節をお読みしたいと思います。

I テモテ3:1-7

「1「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。:2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、:3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——:6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、

悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。:7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

●監督とその資格：必要不可欠なもの

さて、これから私たちは教会の霊的リーダーの姿、特にパウロが挙げてくれている15個の資格を数週間かけて学んでいくのですが、その前にまず覚えていてほしいことがあります。それは教会を監督するリーダーは、これから見ていく15個の資格すべてを満たした人物でなければならないということです。パウロは2節を「ですから、監督はこういう人でなければなりません」と、こんなことばで始めていました。ここで注目してほしいのは、パウロは監督がこういう人であるといいですねとか、こういう人であることを目指していきましようとは言っていなかったということです。そうではなく、彼は「こういう人でなければなりません」とはっきり口にしていました。つまり教会のリーダーはこれから出てくる資格を身につけていても身につけていなくてもよいのではなく、必ず満たした人物でなければならないということです。このリストのうちの幾らかは当てはまるけれども、この部分は当てはまりませんというようなことがあってはならないのです。教会を監督する者にとってすべてのものを満たしていることが必要不可欠だとパウロは教えています。皆さん、流れを覚えていてください。パウロは1節で教会に仕えるということがすばらしい働きであり、その働きにつくことはすばらしいことだけでも、それにはこのような資格を満たしている者で、ふさわしい歩みをしている必要があると言っています。

でもこれはもちろん教会のリーダーが完璧であるということの意味しているものではありません。なぜなら、もしすべての基準を100%完全に満たしていなければリーダーになれないのだとしたら、だれひとりとしてそれにふさわしい人はいません。そうだとすれば、だれもリーダーになることはできません。なぜかというと、私たちはみな失敗し、罪を犯してしまうからです。私たちはみな弱く愚かな存在です。リーダーも例外ではありません。リーダーも失敗をするのです。ここで大切なことは、全く罪を犯さない完璧さではなくて、このリストに載っている霊的に成熟した者の姿がその人物の歩みのうちにはっきりと見て取れるかどうかが問われているということです。ですから教会のリーダーというのは、罪のない特別な人になるものではありません。初めにも言ったように、リーダーも、皆さんひとりひとりも霊的成熟を目指しているのです。みことばを日々実践し、罪を犯せばその罪を悔い改めて、ますます聖さを求めて成長しようとするのです。みな同じ方向を目指して進んでいます。そしてそうやって歩んでいく中であって、その人の歩みのうちにここに出てきているような資格を見出すことができるような人が現れたら、そういう人がリーダーになっていくのです。だからこそ私たちひとりひとりが目標とするべき資格を一つ一つ正しく理解していることは何よりも大切になるのです。目標がわからないまま走っていてもゴールにはたどり着かないからです。

○監督とその資格①：非難されるところのない 2 a 節

では、監督として霊的に成熟した者の姿とは一体どのようなものなのか、パウロはまず監督にとって必要不可欠な一つ目の資格を続けて2節に「非難されるところがなく」と挙げてくれています。これが一つ目の基準です。きょうは残りの時間すべてを使ってこの一つのことばだけを見ます。その後、15個の資格が続いているので、このシリーズがいつ終わるかはだれも分かりません。でも、それだけ時間を取ってでも、それぞれのことをよく理解してください。

この「非難されるところがない」ということばの定義を見る前に、まず覚えていてほしいことは、このことばは実はこれから続けて出てくるすべての資格の一つにまとめたことばであるということです。このことばは、後に続く14個の資格と密接につながっています。例えば「非難されるところがなく」の後に、「ひとりの妻の夫であり」と出てきています。つまりリーダーというのは結婚生活においても「非難されるところがない」者でなくてはならないということです。その後にも、「自分を制し」ということばが出てきています。これはリーダーというのは自分を制することにおいても「非難されるところがない」

者でなければならないということです。その後、「慎み深」さや「品位」においても、「もてな」すことにおいても、その他すべての面において「非難されるところが」ない者でなくてはならないとパウロは教えているのです。これからリストを見ていきますけれども、監督と言われる教会のリーダーは個人の歩みにおいても、また家庭においても、またほかの人との関わりにおいても「非難されるところが」ない者として成熟した者としてあることが求められているのです。

1. 定義

では、そのことを踏まえた上で、実際にこの「非難されるところが」ないというのは一体どういう意味を持っているのでしょうか？このことばは非常に興味深いことばで、新約聖書の中にこの箇所を合わせて3回しか登場しません。しかもその3回ともがこのIテモテの中に用いられています。一つはIテモテ5:7であり、もう一つは6:14に出てきます。そこには「私たちの主イエス・キリストの現れの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。」と記されていました。パウロはここで非常に珍しいことばを用いていたのですけれども、このことばは原語そのまま直訳するとすれば、だれかにつかまることがないという意味になります。このことばの意味を思い描いてみてください。それだけだとちょっと意味がわかりませんか？言われていることは、「非難されるところ」のない人物というのは、その歩みにおいて周りの人からその人のうちの何かを取り上げて責められることがないということです。

想像できると思いますけれども、周りの人がその人を見た時に何か指を指して、ほら、この人はここにいつも変わらず問題を持ってると言えない人物だということです。このとがめられることのない、「非難されるところのない」人物というのはすべての面において潔白な人物です。だからある註解書ではこのことばを、敵につけ込むすきを全く与えないという意味に訳しています。でもこれは先ほども触れましたけれども、霊的リーダーがいったい罪のない完璧な人物だと言っているのではないのです。霊的リーダーも罪を犯すのです。私たちはだれひとりとして罪はありませんとは言えません。ヨハネもIヨハネ1:8で「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」と言っていました。ですから「非難されるところのない」この人物はいったい罪を犯さない人ではなく、残念ながらこの人も罪を犯します。どれだけ霊的に成熟したリーダーであったとしても、悲しいことに罪は犯してしまうのです。思い返せばあのパウロも、自分自身が罪人であるということをよくわかっていたのです。だからこそ自分のことを「罪人のかしら」だと言っていました。

ですからこの「非難されるところのない」人物というのは罪がないわけではありません。この人にも罪があるのです。でもだれかがその人のうちを見た時に、そこには非難されるような明らかな罪を見出すことができないということです。余り想像できなかつたとしたら、こんなふうに言い換えることができます。この人物は口で語っていることと、そのふるまいが同じだということです。この人は、人が見ているところであろうが、人が見ていないところであろうがその歩みは同じだということです。この人はばれて困るような、人に知られてはいけないような罪をそのうちに隠している者ではないということです。この人は外側だけをよくふるまいながら、内側では人には言えないようなことを考えていたり、自分で間違っていることをわかっていながらも、それを行うような人物ではないということです。「非難されるところのない」人物というのは偽善者ではありません。周りの人がその人の心のうちをどれだけ探ろうが、そこに人からとがめられるような罪を見出すことができない。そのような姿が霊的リーダーには求められているのです。

2. 重要さ

では、ここで少し立ち止まって考えてみてください。一体どうして霊的リーダーと呼ばれる人物たちは「非難されるところのない者」であることが求められるのでしょうか？どうして「非難されるところのない者」であることが重要なのでしょうか？それはまず教会のリーダーというものが教会全体にとっての模範

となるからです。そのことはペテロも I ペテロ 5:2-3 で「あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。」と教えていました。ここで覚えていてほしいことは、教会のリーダーにとって何よりも大切なのは、どれほどの権力や支配力を持っているかということよりも、へりくだって模範を示しているかどうかだということです。もし皆さんが優れたリーダーにとって大切なものとは何ですかとだれかに聞かれたとすれば、皆さんはどんなふうに答えるでしょう？もちろんそれぞれいろいろな答えを言うかもしれません。例えばインターネットを見た時に、この世の中ではリーダーに必要なことは地位やステータス、人気や権力といったものを重要視している姿を見て取ることができます。あるサイトではこんなふうにリーダーを定義していました。「リーダーとは組織やチームが一丸となって目の前に立ちふさがる壁を乗り越え、目標を達成することができるように進むべき道筋やビジョン、戦略を示す人物のことです。」と。どうやって人々が進んでいくのか、その戦略を示すことと大切で、どう人を導いていくのか、どう人を動かすのかを知っていることが求められ、リーダーは目標を設定する能力、判断力、コミュニケーション能力やユーモアといったものが求められ、そういったものによって評価が下ったりするのです。

でも教会のリーダーはそうではありません。もちろんそのような能力や知識を持っているということは助けにはなるかもしれませんが、でもそれ以上に、教会のリーダーにとって大切なのは、その人がどんな歩みをしているかです。だからパウロはテモテだけではなく、テトスの中でも同じように教会のリーダーに必要な条件としてこんなことばを記していました。テトス 1:7 に「監督は神の家の管理者として、非難されるところのない者であるべきです。わがままでなく、短気でなく、酒飲みでなく、けんか好きでなく、不正な利を求めず、」と記されています。今 I テモテ 3 章で見ていることとテトス 1:7 に出てきていることが同じなのです。「非難されるところのない者」でありなさいと。聖書はこのようなコミュニケーション能力を持っていなさいとか、このようなユーモアを携えていなさいとか、このような権力を持っていなさいといったことについて触れてはいません。何に触れているかということ、その人がどんな模範を示しているのかということ、その人がどのような存在なのかということに触れているのです。「神の家」を監督する者は群れ全体を導いていく模範であるがゆえに「非難されるところのない者」でなくてはならないのだと。

そして、模範であるべきリーダーがみことばが教えていることから外れてしまえば、間違った道に歩み始めてしまえば、それに続く者たちはどうなるか想像してみてください。その模範に従って道から外れていってしまうのです。リーダーを信頼できなくなってしまうと、教会の中に大きな苦しみをもたらされてしまいます。エペソの教会の中に起こっていたことはまさにそのことでした。霊的リーダーというものがみことばから外れてしまつて教会は混乱したのです。残念ながら、日本でも、アメリカでも、また世界各国でもリーダーが大きな罪を犯したことによって教会が大きな混乱に陥ってしまったことを私たちは見て取ることができます。だからこそ教会を監督する責任を与えられている者は、まず何よりも自分自身を吟味するという大切な大きな責任を負っているのです。パウロはそのことをここで訴えていました。

「非難されるところのない者で」あるということは、何も霊的リーダーにだけ大切なことではありません。これは皆さんにとっても大切なことになるのです。なぜなら聖書ははっきりとすべてのクリスチャンが例外なく「非難されるところのない者」であるように、そのような者として成長していきなさいと教えています。いろいろなところに書いてあります。一つ見るならば、ピリピ 2:14-16 で「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあつて傷のない神の子どもとなり、いのちのことばをしっかり握って、彼らの

間で世の光として輝くためです。」とパウロは書いていました。これは霊的リーダーにだけ書かれているものではなく、クリスチャンひとりひとりに書かれているものでした。この罪にあふれた世にあって、キリストのすばらしさをあかす世の光として生きていこうとするのであれば、私たちは「非難されるところのない純真な者」でなくてはならないと教えられています。だとすれば、ここでよく考えてみてください。私たちはそのような者としてきょうを歩んでいるのでしょうか？周りの人が皆さんの歩みを見た時、そこに何を見るのでしょうか？「非難されるところのない」ようなそんな歩みでしょうか？それとも皆さんのことを指して、ここにも問題があります、あそこにも問題がありますといったような歩みでしょうか？また例えば皆さんが発したことば、皆さんのふるまい、皆さんが考えていること、皆さんが思ったことのすべてをもしだれかが見るとしたら、その人はそこに何を見るのでしょうか？何か非難されるような部分を見出すのでしょうか？公にされたら困ってしまうもの、公にされたら恥ずかしくなってしまうようなものをそのうちに見るのでしょうか？今周りの人はだれも知らないけれども、皆さんのうちに隠しているような罪はないのでしょうか？知られたら困るような、隠さなければいけないような、そんな罪はないのでしょうか？間違っているとわかっている、これだけは私は譲ることはできませんと自分のうちに隠し続けているようなものはないのでしょうか？パウロはまず霊的リーダーに対して、霊的リーダーは教会の模範として生きていかなければいけないと言います。だからこそ「非難されるところのない者」でなくてはならないと。でも聖書はリーダーだけにそう言っているのではありません。信仰の成熟を目指すひとりひとりも「非難されるところのない者」でなくてはならないのです。私たちはだれからも「非難されるところのない」ような者として成長していくことをみことばは求めています。

そして皆さん、大切なことなので覚えておいてください。もし今皆さんが隠していると思っていることも神様の目にはもう明らかだということです。みことばははっきりとこのように言っていました。詩篇90：8では「あなたは私たちの不義を御前に、私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。」と。同じことを伝道者の書12：14でも見ることができます。「神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」と。私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちは確かに人の目はごまかせるかもしれませんが、自分の心のうちにさえとどめていけば、だれにもばれないから大丈夫だと安心しているかもしれません。でも神様はそのすべてのことを知っておられるということです。神様はそのすべての罪を明らかにされるということです。だからこそここでよく考えてみてください。私たちはだれを恐れるべきなのか——。私たちは心に罪を持ち続けることが間違っていることはよくわかっています。主の前にそれが喜ばれないことであるということをお祈りください。

● どうすれば非難されるところのない者として成長できるのか？

では問題は、どうすれば私たちは罪を心のうちに隠したりするのではなく、「非難されるところのない者」として成長できるのでしょうか？少なくとも二つのことを挙げることができます。

a) 罪を素直に認めて、悔い改めること

まず一つ目に言えることは、罪を素直に認め悔い改めることです。私たちが罪を犯したのであれば、それを言い訳することなく正直に認め、主の前に告白することが大切になります。でもこれは皆さんよく知っています。しかし、私たちはいろいろな間違った動機によって罪を告白した気になっていることが多々あります。どんなことかというと、ある時は私たちは恐れによってそれをなすかもしれません。後ですべてのことがばれるのは怖いから、後で明るみに出て人々にさばかれるのは嫌だから、その前に一部だけ告白しよう。また恐れだけではありません、ある時は私たちはプライドによってそれをなすかもしれません。すべてが明るみに出れば自分の信用や評価をすべて失ってしまう。それだけは困るから、そうなる前に、被害が大きくなる前に過ちの一部だけを認めてしまおう。またある時はある種の

悲しみによってそれをなすかもしれません。自分のしでかしたことが余りにもひどくて、その結果が悲惨で自己憐憫に陥って、この状況からどうにか抜け出すためにとりあえず神様に赦しを求めようと。

でも皆さん残念ながらそれらはどれも本当の悔い改めではありません。なぜかという、パウロはこんなことを口にしていました。Ⅱコリント7:10で「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」と。パウロはここで何を言わんとしたのか簡潔に言えば、自分のことにしか関心を払っていないようなそんな世の悲しみは、本当の悔い改めをもたらすことはないということです。悲しみを持つこと自体が悪いものではありません。もっと言えば、間違っただけをすればだれでも良心が痛み、罪悪感や悲しみを覚えます。子どもでも覚えます。でも悲しみを持つだけが悔い改めではないということです。間違っただけをしたことを悲しんでいるのは悔い改めではないということです。問題はその悲しみの矛先がどこに向いているかということです。その悲しみの矛先が自分自身に向いているのであれば、それは世の悲しみです。その悲しみが神様を向いているのであれば、それは神のみこころに添った悲しみであり、救いに至る悔い改めをもたらすのです。なぜなら本来私たちが罪を悲しむべき理由は、愛する神様に対して自分たちが泥を塗ってしまったということです。だからこそそんな神様の前に自分は間違っていましたと、自分がしたことはあなたを悲しませましたと、そのように心を砕いてすべての罪を正直に認めて悔い改めることが求められています。そこに自分が今こんなことをしたら、こんな結果が来るのではないか、こんな結果を伴って自分が恥をかくのではないかと、そういった自分に対する思いはないということです。

ここで私たちに問われていることは、私たちが何を犠牲にしたとしても、神様を愛するか、それとも自分を愛するかだということです。確かに罪と向き合うことは私たちにとって難しく思えることです。だからこそ私たちは恐れを抱いてしまいます。私たちは時に恥を受けたくないと言って、それを隠そうとするのです。私たちはそれに勝利しなければいけません。では、勝利するための方法は一体何でしょう？それはイエス・キリストを覚えることしかないのです。私たちは自分自身の力や意思によって罪に勝利することはできません。主が私たちのために何をなしてくださったのかをいつも覚えることです。この方は神の御子としてこの地上に来られました。この方のうちには罪などいっさいなかったのです。私たちとは全く違ってこの方こそ非難されるところなどいっさいありませんでした。この方は罪のない者として完璧な生涯を過ごされたのです。そしてそんな罪のない救い主イエス・キリストがみずから進んで私たちの罪のために恥を耐え忍んで十字架にかかってくださいました。本来、私たちひとりひとりが受けるべきその罪の罰を代わりに受けてくださったのです。本来私たちひとりひとりが味わうべき辱めを代わりに味わってくださったのです。本来私たちひとりひとりが受けるべき神の怒りをこの方は耐え忍んでくださったのです。そしてその死によって、私たちに愛を示し、罪の赦しというものを与えてくださいました。これは私たちが何かをしたからではありません。私たちに對して主が一方的な恵みを持って、この世に救いを備えてくださったのです。

私たちがそのことを心から信じているのであれば、私たちに問われているのはどのように罪と向き合うかということです。主がどれほどの犠牲を払ってくださったのかを、どれほどの辱めを受け、どれほどのきつい苦しみを味わったのかを覚える時に、感謝して自分の罪を素直に悔い改めるのか、それとも自分のことを考えて、これがばれたら自分が恥ずかしい、これが公になれば自分が大きな影響を受けると、自分に関心を置いて罪を隠すかです。そのことが私たちには問われています。そしてもしそれでもなお私たちが自分の罪を悔い改めることなく、今も心のうちに隠そうとしているのであれば、その心は渴きや何とも言えない苦しみを覚えませんか？ダビデがまさにそうでした。思い返してみてください。ダビデはバテ・シェバと姦淫の罪を犯し、その後、夫であったウリヤを殺害したのです。そしてその出来事を振り返って詩篇32篇を記していました。その1-4節で彼は「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。【主】が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は。私は

黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。」と書いていました。ダビデはかつて自分の犯した罪を心のうちに隠していたのです。ダビデは自分の犯した罪は隠し通せると考えたことでしょう。自分はどうかうまくやってのけると。彼は王様でした。だからここでそれがばれれば失うものが大きい。だから隠そう、黙っていようと。でもその結果、どうなったとダビデは書いていましたか？彼のからだも心も痛みや苦しみを覚え、弱り切っていました。「一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり」と書いていました。彼を苦しめていたものはほかでもない神様でした。神様が彼に痛みを与えていたのです。一体どうして神様はそんなことをダビデにしたのでしょうか？神様は愛のないお方だったのでしょうか？もちろん違います。神様はダビデのことを愛していたからこそ、彼が罪から立ち返ることができるようにと懲らしめを与えたのです。罪を黙ったままにするのではなく、告白して悔い改めなさいと、懲らしめを通して彼に教えたのです。だからこそ彼のもとに預言者ナタンがやって来てダビデの罪を責めた時に、彼は自分自身のことを守ろうとはしませんでした。言い訳をすることもありませんでした。ナタンに言われたことに対して怒りを燃やすこともありませんでした。自分のやったことをごまかすこともありませんでした。彼はほかの人や状況に責任をなすりつけることもありませんでした。私は主に対して罪を犯したと、彼は正直に言ったのです。それが彼の答えでした。そして心からその罪を悔い改めたのです。神様はご自身のものをそのような懲らしめを用いて罪から離れるように教えることがあるという、そのようなことをされる方だということです。そしてそれは主からの愛だということです。

ヘブル 12:5-6で「そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」」と書いていました。この主の愛を覚えることです。この主の愛を自分のこととして考えることです。この方はわたしたちの罪を赦してくださいました。その方を覚え、罪から離れて罪を悔い改めて罪から離れて生きていくことです。皆さんの悔い改めはダビデのような悔い改めでしょうか？皆さんが罪を指摘された時や罪に気づいた時に、真っ先に出るのは言い訳でしょうか？ダビデはそのようにはしませんでした。ダビデは自分が神の前に罪を犯したということを素直に認め、心から悔い改めていたのです。もしまだこの中に主のすばらしさを知らない方がいるのであれば、そのことをきょう知って帰ってください。この主は私たちの心をすべてご存じです。周りの人の目は幾らでもごまかせます。でも主はもう皆さんの心のうちをよく知っています。人の目に隠し通せることでも、この方の前にはすべて明らかです。そしてこの方の前に必ず立つ日がやって来ると聖書は教えています。そんなさばきの日がやって来るのです。でも同時に、聖書は、この主は私たちがどれほど罪深い存在なのかを知っていながらも、この地上に来て私たちのために十字架に架かってくださったと教えています。自分のとっている行動を見る時に罪深い存在だと、私たちは思います。でも主はそれ以上に私たちが罪深い存在だと知ってなお十字架にかかって死んでくださったのです。その罪を赦してくださいました。過去も今も未来の罪もすべて赦すと約束してくださいました。この方のうちに罪の赦しがあります。この方こそが唯一の救い主です。私たちのために、あなたのために死んでくださった救い主であるこの方をきょう信じてください。そしてこの方のために生きる人生を始めてください。

b) みことばによって心を満たすこと

また二つ目に言えることは、みことばによって心を満たすことです。これはもう当たり前のように思われる方もいるかもしれませんが、でも考えてみてください。私たちが罪に陥る時、多くの場合、私たちは見るべきところを見ずに、心が別のものに支配されてしまっていることが多々あります。詩篇の著者が詩篇 1:1-2で「幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かな

かった、その人。まことに、その人は【主】のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」と言っていることを見ることができます。また詩篇 119:11 では「あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。」と。詩篇の著者は罪の誘惑や危険が周りであることをよくわかっていました。だからみことばで心を満たしたのです。神様のことばを心の中にたくわえようと思いました。私たちも同じことです。私たちもみことばをたくわえることによって、何が神様の前に喜ばれることなのか、何が神様の前に喜ばれないことなのかを知ることができます。だから、みことばなしでは「非難されるところのない者」として歩むことなど絶対にできません。ですから私たちはみことばによって心を満たし、そのみことばに立って生きていくことが求められています。そうして私たちは成長していくのです。

3. 適応

さて、きょう私たちは監督の資格の一つ目、「非難されるところのない」ということばを見てきました。それが何を示しているのかということ、それが皆さんひとりひとりにとって大切なのだということを見ました。最後に、このことばを受けて、それぞれ皆さんに考えてほしいことが幾つかあります。

1) 長老

まずこの 3:2 は特に監督について書かれていました。ですから、長老の皆さん、私たちはきょう見てきたように教会の模範として生きていくことが神様から求められています。周りの人が見た時に、私たちのうちにだれかから非難されるようなところがないかどうかを私たちはいつも正しく吟味していることが必要になります。パウロは I コリント 9:27 で「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」と言っていました。私たちに与えられている責任は非常に大きなものです。正直に言えば、私自身もこのメッセージを作っている時にも、これを語る時にも何度も心を砕かれました。教会に仕えていくという働きはすばらしいものです。でも、神様の教会であるこの教会にリーダーとして立つということは非常に大きな責任があります。ですから、長老の皆さん、私たちはこの目標を目指して、いつもこれにふさわしい者として成長し続けていきましょう。

2) 教会のリーダーとして仕えたいという願いを持つ人

次に、長老になりたい、教会のリーダーとして仕えたいという願いを持っておられる方がおられるのであれば、それはすばらしいことだとパウロも言っていました。ですからどうかその思いが強められるように祈り求めてください。そして祈り求めながら何をすべきなのかということのパウロは教えていました。それは今、「非難されるところのない者」として成長することです。リーダーになってから「非難されるところのない者」になるわけではありません。「非難されるところのない者」として歩んでいる者がリーダーになっていきます。ですからそのような者として、みことばに立って歩み続けてください。

3) 男性

次に、男性の皆さん、よく考えてみてください。先週の 1 週間を振り返って、皆さんがどんなことばを口にしたのか、職場でどんな態度をしたのか、どんなものをネットやテレビやそういったもので見たのか。そのすべてのことがもし公になるとしたら、皆さんにとってそれは問題ですか？ そのことは皆さんにとって大きな辱めを受けるようなことでしょうか？ それとも大丈夫だ、問題ないと言えるでしょうか？ もし問題だと思ふのであれば、それがどうしてなのかをよく考えてみてください。私たちは罪を犯した時に、すぐに神様の前に悔い改めることが求められています。そのことはきょうも見ました。でも同時に、私たちは罪を犯した相手に対してもすぐに赦しを求めることが大切になります。そのような者として歩んでいるのでしょうか？ 実を言うと、パウロはきょう悔い改めについて見た箇所後にこんなことを記していました。II コリント 7:11 で「ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、

処罰を断行させたことでしょう。」と。神のみこころに添った悲しみが熱心を起こさせたというのは一体どういうことかということ、真に悔い改めた者というのは、その罪をそのままよしとするのではなく、その罪をどうにかして取り除きたいと強い願いを持って歩むものだということです。行動に移すものだということです。真に悔い改めた者はだれかとの間に罪の問題があったとすれば、悔い改めて自分の中で解決して、はい、終わりですではなくて、その罪を解決することを熱心に求めるものなのだということです。それが真の悔い改めのあるべき姿だとパウロは教えていました。

きょうも見たように、私たちは神様の前に告白することが求められています。でも時にそれは簡単なことかもしれません。罪を犯した相手のところに行って赦しを求めることの方が私たちにとって難しいことかもしれません。でも真の悔い改めは、言い訳することなしにそれをするのです。そんな者として歩んでいるのでしょうか？

また特に結婚されている皆さん、皆さんの奥さんや子どもたちは皆さんのことを「非難されるところのない者」として見ているのでしょうか？家庭において、へりくだって模範を示す存在としての歩みをしているのでしょうか？私を含め、私たちは足りない部分がたくさんあります。ですからともに成長していきましょう。

4) 女性

そして最後に、女性の皆さん、リーダーにならなかったとしても、男性と同じようにここに書かれている霊的成熟を目指していくことを神様は求めています。例えば皆さんの夫や子どもたちが家庭で皆さんが立てているあかしを見た時、そこに何を見るのでしょうか？キリストをほめたたえる姿でしょうか？愛を持って仕える姿でしょうか？何回もこのメッセージで言ってきましたけれども、これは罪を犯さないという話ではありません。でも罪を犯したのであれば、その罪をすぐに悔い改めて、悔い改めた後に主にますます喜ばれる者として歩む姿でしょうか？それとも教会やほかの姉妹たちと過ごしている時と家庭では違う姿を見せているのでしょうか？「非難されるところのない者」として歩んでいるかということが問われているのです。男性も女性も同じです。弱い部分、欠けているところがたくさんあります。ですからそのことを覚えて、ともに祈り成長していきましょう。

聖書は例外なく私たちはみな「非難されるところのない者」であるようにと求めています。確かに高いハードルです。私たちの力ではできません。でもだからこそ私たちの主が何をしてくださったのかを覚え、この方に頼り、祈り求めながら、みことばに立ってそのことを求め続けることです。罪を悔い改めながら、この1週間もともにこの目標を目指して歩んでいきましょう。